

# 動機づけと価値の研究についてのいくつかの問題

大 芦 治

## 1. はじめに

先の小論（大芦，1994）<sup>1)</sup>において，筆者は，現在の心理学における動機づけ（motivation）の研究が価値（value）の問題を見過ごしてきたことを報告し，若干の考察を加えた。その概略を紹介するならば，以下のようになる。

これまでの動機づけ研究は，純粹に理論的な発展を目指す破究を除けば，概ね，以下の限られた領域を対象にして行われていた。それは，学業場面での動機づけを高揚させること，うつ状態のような臨床的にみて動機づけの低下した状態を改善させること，そして，ビジネス場面での動機づけを高揚させることなどである。これらの研究では，動機づけを高めるためのメカニズムが積極的に研究されたが，動機づけを高めるべく対象がいかなる価値を有するものであるかどうかは，ほとんど関心がもたれていなかった。学業は価値あるものでありそれに意欲を燃やすことは当然よいことであり，やる気の低下したうつ状態を改善しやる気を出すことは，必要なことであったのである。しかし，価値観の多様化した現代社会において，目の前にあるものはすべて価値があるといった単純な考え方が通用しなくなっていることは明かであろう。そこで，この価値という視点を積極的に組み入れた動機づけの研究を進めて行かなければならないというのが，その主旨である。

この小論は動機づけの研究において価値の問題が看過されてきた理由を論じたものであるが，行われた議論は，主に，研究の外側からのものである。実際に，研究を行うにあたってとるべき方法については，ほとんど述べなかった。従って，本稿では，この方法について議論を行う。

動機づけの研究に価値の問題を取り入れる方法としては，以下の2つが考えられる。1つめは，人間が動機づけられる価値としてどのようなものが考えられるのか，あらかじめリストアップし，それらの価値と行動の関係を検討しようというものである。この方法の特徴は，価値というものが，人間の外側にはじめから客観的に存在していて，その外的な価値に対する人間の動機づけを論じようというもので，いわば，外側からのアプローチといえる。

次に，2つめの議論は，これと対をなすもので，内側からのアプローチとでもいうべきものである。この方法では，人間の外側にある客観的な価値については，積極的に扱わない。ここで問題にするのは，むしろ，人間が内側からその本人にとって価値あるものを見いだしてゆくプロセスを明らかにしてゆくことである。この方法は，人間の内側の価値観形成のメカニズムを重視するもので，そうした点では，これまでの心理学の知見を手がかりとして援用することができる。

## 2. 外側からのアプローチ

価値と動機づけの関係を扱った研究者として，M. Rokeach の名前は，真っ先に取り上げられなく

てはならない。そして、この Rokeach がとった方法こそ、ここで取り上げる外側からのアプローチであった。Rokeach (1980)<sup>2)</sup>によれば、価値とは、超越的なものであり、対象や状況を越えるものであるという。彼は、この価値をさらに2つの種類に分けている。1つは、究極価値 (terminal values) といわれ、生存の望ましい最終状態、平等の状態、内的調和の状態にかかわるもので表1に上げるような18個が考えられている。もう1つは、道具的価値 (instrumental values) で、対象や状況を越えた行動の仕方の理想化されたもので同様に表1にいくつかを掲げておく。

表1 Rokeach の究極価値と道具的価値

究極価値	道具的価値
英知	知的であること
自由	有能であること
自己に対する尊重	親切であること
成就に対する意識	責任をもつこと
世界の平和	想像的であること
平等	自立的であること
美の世界	心が広いこと
内的調和	論理的であること
家族の安全	意欲的であること
社会的承認	人助けをすること
幸福	勇気があること
刺激的な生活	自分が制御できること
快適な生活	愛情があること
真の友情	寛大であること
成熟した愛	元気なこと
国家の安全	礼儀正しいこと
喜び	清潔であること
救済	従順であること

Rokeach は、この価値を最も高い位置に置き、価値—態度—行動というピラミッド型の連鎖を考えていた。この関係を確かめるために、Rokeach は、様々な行動の生起を価値から予測するという研究を行った。様々な研究結果を合計すると、検討された684の行動と価値の関係のうち、実に、252の関係が統計的に有意な関係であったという。また、Rokeach によれば、この連鎖の中で、最も変化をしにくいのが価値で、逆に、変化しやすいのが行動であるという。従って、変化しにくい行動でも、価値を変化させてやることで簡単に変化が起こると考えた。

この Rokeach の指摘は、多くの動機づけに関する研究が、価値の問題をほとんど無視してきたことに一石を投ずるものとして評価できる。しかしこのアプローチはいくつかの点で十分なものとはいえない。

まず、Wigfield ら (1992)<sup>3)</sup> の指摘を待つまでもなく、究極価値がア・プリオリに指定できるとする立場は、単純で、一面的である。最も、このような人間の究極的な価値を規定する作業は、倫理学や人類学の領域に属するもので心理学の扱うものではないという意見にも耳を傾けるべきで、この問題にはこれ以上深入りしない。

さて、究極価値の種類の問題は脇に措いて、Rokeach の研究の次なる問題について考えてみる。

Rokeach の研究は、基本的に既存の価値と態度や行動の対応を前提としており、この考えに従えば、我々の日常の社会生活にとって必要な価値も、さらには、どんな独創的な思想家や芸術家が創造する価値も、たどってゆけばしまいには究極価値に行き着くにすぎない。このような考え方は分かり安いものであるが、実は、単なる還元主義に落ち込む危険性を孕んでいる。人間の価値追求は、既存の価値の追求にとどまるものでなく、何らかの意味で創造的な側面を含むという点を見落としているのである。このようなアプローチ立つ研究が、人間の内側で起こっている力動的な価値追求のプロセスを捉えるのにやや生彩を欠いたものとなることは、止むを得ないであろう。人間の内部で起こっているすべての価値追求のプロセスも、後言的な説明ですべて片付けることができるからである。

以上のような訳で、筆者としては、この方法よりも一方の内側からのアプローチに期待を寄せているが、それは、次節で論ずる。

### 3. 内側からのアプローチ

#### (1) このアプローチの前提となるもの

この方法は、外側からのアプローチのようにいくつかの超越的な価値が存在するかどうかということは、問題としない。この方法は、むしろ、人間がどのようにして価値に動機づけられるか、そのプロセスを人間の内側に求めるのである。この内側からのアプローチでは、まず、人間というものが、いつでも、絶えず、価値を希求しそれに動機づけられるものであるという暗黙の前提から吟味してゆく。そうした前提を踏まえるからこそ、人間の価値追求の内的なプロセスがより露にできると考えられるのである。

ネズミは、半日も餌を与えないと、お腹がすいてくる（もっとも、これは、ネズミだけに限らないが）。目の前に餌がある。ネズミは、餌を食べるための行動に動機づけられる。この場合、ネズミにとって餌を食べる行動は、価値があるといえるだろうか。一見いえそうだが、実はこの言い方は正しくない。餌を食べることは、ネズミにとって価値があるのではなく、ネズミが生きるために有益なのである。つまり、餌を食べることは、ネズミの生存にとって価値があるのである。なぜなら、ずっと餌をたべなければネズミは死んでしまうからである。餌を食べずに死んでしまっても、そのネズミがネズミであったという事実は、永遠に事実であり、餌を食べてこれ以上生きながらえることは、これまでそのネズミが少なくとも幾日か生きてきたのであれば、必須ではない。従って次に生じてくる問題は、そのネズミが生存することが、価値があるかどうかという問題である。生存することに価値が在れば、必然的に、餌を食べるといことも価値が在るからである。

ネズミに、「あなたが生存することは価値があるか」と質問してみればよい。おそらく、何も答えられないであろう。それもそのはず、およそ人間以外の動物に価値判断などできないのである。よくいわれることだが、自殺をする生き物は人間だけだそうである。もし、動物に自殺に似た現象がみられても、これは、本能であると説明される。夏の虫がキャンプファイヤーに飛び込む現象も、本能と考えられ、虫が生存の意味に悩んだ末に自殺したとは考えない。ところが、人間の中には自分が生存することは意味がないと考えて自殺する人がいる。ここに生存ということの価値判断が行われている。だから、おそらく、「あなたが生存することは価値があるか」ときかれて答えることができるのは、人間だけな

のである。にもかかわらず、これまでの心理学、とくに、行動主義の流れを汲む研究者たちは、人間の行動も動物の行動もその仕組みは本質的には全く同じで、ただ、進化の度合で複雑か単純かの違いがあるのみと考えていた。動物の動機づけを研究すれば人間の動機づけも理解できると考えていた。しかし、これがおかしいのは明らかである。

次に、以下のような側を考えてみる。自分が犠牲になって死ねば、多くの仲間が救われ、自分が生き延びれば、多くの仲間が犠牲になるというような場面に遭遇したとする。仲間を救うことはよいことであり価値があることである。だが、自分の生存も基本的な価値である。どちらを選択するか。こういう選択をできるのは、おそらく、人間だけであろう。動物には、生存と他の価値を秤に掛けるようなことはできないはずである。人間がこのようなことができるのは、人間には誰からも邪魔されない意志の自由があるからである。おそらく、意志の自由があるから価値の選択ができるのであり、意志の自由のない動物には価値の問題など存在せず、究極的にはすべて生存と種の保存という2つの価値に集束するはずである。

これは、一見、古い、哲学の議論のように思われるが、現代の心理学においても一歩価値の問題に足を踏み入れれば避けて通れない問題である。なぜなら、人間は、いつでも、自分の意志の許に主体的、自立的に価値を判断し、それを希求しているとは限らないからである。むしろ、我々の行動の大部分は、このような価値判断とは別のところで決定されていることがほとんどである。確かに、数人の仲間と昼食に出かけて、仲間の多くがカレーライスが食べたいというのに反対し、一人でうどん屋に行くことを主張する必要はないであろう。しかし、人間が、取るべき行動を選択し、それに動機づけられるのは、カレーライスとうどんのどちらがその人にとって価値があるかというような時ばかりではない。むしろ、これまでの心理学がそのようなレベルの現象ばかりを扱ってきたからこそ、価値の間を見過ごしてしまったのである。

次項以下で見て行くと、人間というものは、重要な行動を選択する時でさえ、意外にも、対象の価値判断を行わないまま、その行動に動機づけられてしまうものなのである。だから、まず、この問題、すなわち、人間とはどのようなとき自分で主体的、自律的に価値を選択することができるのか、その条件を探ってゆかねばなるまい。

## (2) 自由からの逃走

ナチス・ドイツによるユダヤ人の大量虐殺は、なぜ人間がかくも残虐な行動を難なく行ってしまうのか、心理学者たちにも大いに疑問をかき立てた。第二次世界大戦が終わると、この疑問は、戦中にアメリカに渡ったドイツの心理学者たちも巻き込んでブームを引き起こした。

おそらく、それらの研究の先鞭をつけたのが、E. Fromm (1941)<sup>4)</sup> である。Frommによれば、第一次世界大戦の敗戦による帝政の崩壊によってドイツの国民は、それまでにない自由を獲得することができた。しかし、そのような自由と裏腹に、旧来の政治的、経済的な階級制度は破壊の危機にさらされる。さらに、頂点に達したインフレーションも手伝い、それまで、古い階級制度によってかろうじて安定を維持してきた中産階級は、行場のない不安の中に陥れられることになる。こうした中産階級の行場のない不安のうっ積をエネルギーとして巧みに利用したのがナチズムの運動であるという。蓄積されたエネルギーは、ユダヤ人に投影され、人種偏見、人種差別から、その壊滅をめざすまでに至ったのである。

Fromm の説は、いわばスケープゴート説であるが、人間が自由を獲得すればするほど、その反面として不安が生じ、これが自由から逃れようとする力として働くことに注目したのは彼の慧眼によるものだろう。価値判断をできるのは人間だけであり、それは、人間には意志の自由があるからである。もちろん、意志の自由は哲学的な命題であるが、人類は、この意志の自由を現実の社会で、毎日の生活で、実現することに長い歴史を費やして来た。しかして、人間は、自分で実際に自由を得て、主体的、自律的な価値判断をすることができるようになった次の瞬間には、そこから逃れようという行動に動機づけられてしまうのである。

### (3) 権威主義的人格\* (注)

Fromm の卓見は、価値についての心理学的な理解に1つの方向づけを与えてくれるが、彼が行った分析は、どちらかといえば、社会的、歴史的なものであり、個人レベルでの価値の選択を扱う本稿の目的にはまだ距離がある。事実、Fromm は、社会性格という術語を用い、同じ集団の大部分の者が共通してもつ性格特徴を取り上げ、これを鍵としてナチズムをはじめとした社会現象を説明しようとしていた。

これに対し、T. W. Adorno らは、Fromm がナチズムを支えた社会的性格であるとした権威主義的人格 (Authoritarian Personality) を個人のパーソナリティ変数として取り上げ、研究を進めた。権威主義的人格とは、外見的には非寛容で偏狭な反民主主義的傾向をあらわすが、その人格特徴として Adorno は以下に示すようなものを列挙している。(1) ありきたりの中産階級的な価値観に固執する因習主義、(2) 内集団の道徳的権威に無批判に盲従する権威主義的従属、(3) 因習的価値の脅威に対して非難、攻撃を加える権威主義的攻撃、(4) 想像的、思索的、内在的基準を軽視し、具体的・外的な対象に依存する反内省的傾向、(5) 迷信やステレオタイプに対する信奉、など9つほどにのぼる。Adorno は、この9つを下位尺度として構成されたファシズム尺度 (F 尺度) を作成し、これを用いた。

権威主義的人格は、はじめ、政治的に右翼的な立場をとる者に特徴的な人格と思われたが、F 尺度のデータが収集されるに従い、急進左翼的な立場をとる者のなかにも権威主義的人格を示す者が見られることから、この考えは次第に批判をうけるようになっていった。

そこで後になると E. Frankel-Brunswik らは、権威主義と政治的なイデオロギーを独立とみなし、権威主義的人格はむしろ認知機能によって特徴づけられるとした。Frankel-Brunswik は、権威主義的人格には多義性への非寛容さ (intolerance of ambiguity) とでもいうべき特徴がみられると指摘した。権威主義的人格の者は、白黒のはっきりつかない曖昧な状況に耐えることができず、このような状況において因習的、権威的な価値に盲従する傾向があると考えるのである。

ここまで述べた権威主義的人格の特徴をみると、その多くは、主体的、自律的な価値判断を放棄し、既存の価値観に無批判、無反省に従おうとする態度がうかがえる。そこには、自ら価値判断を行い、その価値を希求することを避け、無批判に、無反省に既存の価値を求めて動機づけられてしまう人間の姿を垣間みることができるのである。

(注) \* 本項における権威主義的人格の諸研究の展望は藤永 (1992)<sup>5)</sup>、および、Goldstein ら (1978)<sup>6)</sup> の記述によるものである。なお、このうち藤永の書は、筆者が本稿全体の論をすすめるにあたって大いに参考になったことを付記しておく。

### (4) 自由と束縛の狭間で

ここまで論を進めてくると、動機づけに価値の視点を取り入れなくてはならないといっても、それが、どの行動はどのような価値をめざして動機づけられているというような単純な対応関係を扱えば事足りるものでないことは明かであろう。むしろ、明らかにすべくは、われわれ人間が、主体的、自律的に、自由な意志を行使して価値を選択し、それに動機づけられるということはどのようなことかである。

現実問題として、われわれが全く自由に意志を行使して価値を選択することは不可能であろう。しかし、動物のように生存と種の維持という究極の価値に奉仕する本能というメカニズムによってすべての行動の目標が自動的に決められていることもないであろう。人間にはそうした動物のような究極の価値に収斂する行動の目標体系が崩れてしまったのである。それだからこそ、権威主義的人格の研究で見たように、ちょっと気を緩めて自律的、主体的な価値判断を放棄した途端に、人間は、取り返しのつかない悲劇を招いてしまうのである。

おそらくは、人間が何らかの価値を選択するのは、今上に述べた、完全な自由と、動物のような生存と種の維持という価値への完全な束縛の間の線上のどこかの点で行われているはずである。人間が長い歴史をかけて追求してきたのは、いうまでもなく、完全な自由の方向であるが、権威主義的人格の研究が示したのは、自由な方向に直走る人間が、意外にも、急転直下、束縛の方向に引き戻されてしまう危険性なのである（もっとも、完全に動物的なレベルまで戻るのとは不可能であろうが）。

このような線上のどこかで行われる価値判断とは、一体どのようなものなのであろうか。また、その線上のいずれの点で価値判断を行うことが適切なのであろうか。筆者は、この問題の解決の方向を以下の2つの研究の中に見いだす。まず、1つめは、道徳性の研究であり、もう一方は、E. H. Eriksonの提唱した自我同一性（ego-identity）についての研究である。残念ながら、この双方を詳細に論ずることは、紙面が許さない。以下、それぞれの導入のみを簡単に示し、詳しくは、いずれの機会に譲る。

#### (5) 道徳性の研究

C. G. Jung (1926)<sup>7)</sup> は、1人の神経症の青年のことを書いている。この青年は自分にたいへん好意を持っている貧しい中年の女性教師から生活費を受け取って自分では働かずに優雅な暮らしをしているという。彼にいわせれば、自分は神経症で働けず、この女性教師から生活費をうける必要があるのだという。Jung は、この神経症の治療は、この青年の反道徳性を自覚させることからはじまると述べている。

Jung は、精神分析の諸家の中でも、無意識と意識の相補性ということを重視した人として知られる。Jung によれば、無意識とは決して Freud のような動物的なエネルギーの源泉ではない。人間が精神的な健康を維持するためには、無意識も意識も適正な水準で機能し、相補はなくてはならない。そのどちらかが過剰に機能した時の不釣り合いが神経症を招くのだという。そして、この神経症的な不釣り合いがある種の不道徳と結びついているのである。Jung は、また、神経症の治療は、まず、現実を直視することからはじまるといっている。現実を直視することとは、決して、意識を過剰に働かせ万事を知的に理解することでもなければ、無意識的な感性や直感に浸りきって物事を悟ったようになることでもない。ちなみに、よく知られている Jung の内向性、外向性の概念も、このような文脈の中でこそ理解でされる。内向性の人とは、価値判断が主として内的基準に基づき行われる人のことであり、外向性とは、逆に、価値判断が外的基準に基づき行われる人のことである。Jung にいわせれば、極端な内向性も極端な外向性もよくない。だから、Jung は、人間が自己実現に至るためには、夢などを

通して、無意識からメッセージを受け取り、自分にとって優位でない方の傾向を少しずつ意識的に人格の中に取り入れなくてはならないという。

いうまでもなく道徳性は、人間が社会の中で適応的であるための鍵となる価値であるが、この Jung の説に従えば、意識—無意識、あるいは、外向性—内向性といった人間の精神の中にある対立的な特性の線上のどこかの点に、道徳性の適正な水準があるように思われる。前項で、筆者は、人間の価値判断は、完全な自由と、動物のような生存と種の維持という価値への完全な束縛の間の線上のどこかの点で行われるものであると述べた。もちろん、筆者が述べた線と Jung の考えている意識—無意識、外向性—内向性といった線を単純に同一のものと考えすることはできないが、線上のどこかに適切な点を見いだすという意味で、この Jung の考えは1つの手がかりとなるのではないかと考える。

藤永(1984)<sup>8)</sup>は、冒頭にのべた Jung の神経症の青年の例を取り上げて道徳性の問題を論じ、以下のように結論づけている。少々長くなるが、的確な表現であるので引用する。

「我々はふつう、道徳とは社会から強制された窮屈な拘束であり、自由や喜びを妨げる障害だとみなしている。しかし、上のユングの断定は、道徳性がそのような一面的なものでないことを示唆している。道徳的退廃によって、人は身動きならない神経症の罠に陥り、かえって自由や洞察力を失ってしまう。道徳性とは、おそらく個性と社会性との最も重要な接点の一つであろう。人は、これによって社会的拘束をむしろ個性の一部として真に同化することができ、その結果、より高度の自由に達するのである。」

#### (6) 自我同一性の研究

前項では、道徳性の研究を取り上げた。この道徳性は、人間をとりまく諸価値の中でも主として社会的な適応と関連している。

ところで、天才的な芸術家のつくる作品や天才的な思想家の著す著作は、人間にとって代えがたい価値をもっていることは異論がなかろう。しかしながら、この天才たちが、道徳性に代表されるような社会的適応を価値として追求したかというところではない。むしろ、それどころか、天才といわれる者の多くは、社会的な適応という意味ではかなり不適格者であることが少なくない。たとえば、Fromm(1941)によれば、宗教改革の M. ルターは、典型的な権威主義的性格の持ち主であったという。典型的な権威主義者が、なぜ、死後数百年に渡って名を残すような創造的な活動をなし得たのであろうか。Erikson の伝記的著作、「青年ルター」<sup>9)</sup>や「ガンディーの真理」<sup>10)</sup>はこのような天才達の生涯を、生涯発達図式の中の自我同一性を鍵にして解明している。そこには、天才の創造性が自我同一性の確立と密接に結びついていることが示されている。

Erikson の生涯発達図式によれば、自我同一性によって獲得される徳目として忠誠 (fidelity) が挙げられている。この忠誠とは「価値体系にはどうしても矛盾が伴うにもかかわらず、強制されずに誓った忠義を支える能力のことである。これはアイデンティの礎石であり、強固なイデオロギーと確かな仲間意識から感化を受ける (Erikson et al. 1986)<sup>11)</sup>」ものであるとされる。自我同一性の確立が人生の礎となる価値の選択というものを大きな要素として含んでいることは、明かであろう。

ルターやガンディーの自我同一性の確立は決して容易なものではなかった。彼らは、自分の幼年時代に由来する様々な心理的葛藤を解決し、自我同一性の中に取り込むために、人一倍、苦痛や辛酸をなめなければならなかった。そうして、成し遂げられた自我同一性であるからこそ人々の心に深く刻み込む

ことのできるような価値を見だし得たのである。Marcia (1966)<sup>12)</sup>は、自我同一性の確立が比較的簡単に行われることを自我同一性の早期完了 (forceclosure) と呼び、こうして成し遂げられた自我同一性が幼児以来のありきたりの価値を一面的に受け入れるだけの柔軟性に欠けるものであるとしているが、これも、この問題が、決して、単純な大人の世界への適応に留まるものでないことを示唆している。

このように考えると自我同一性の問題は、動機づけと価値の関係の研究の中でも、特に人間による価値の創造という問題に焦点をあてるとき、1つのポイントになって来るように思われる。

#### 4. おわりに

本稿では、動機づけ研究に価値の問題を取り入れるための方法を2つに分けて論じてきた。そして、内側からのアプローチでは、研究の現状を鑑み、道徳性の研究と自我同一性の研究という2つの既存の研究を手がかりとして取り組む可能性を示唆した。しかし、この道徳性と自我同一性という2つの研究文脈も、研究を進めるとほどなく1つに合流するはずである。本稿では取り上げなかったが、道徳性研究の主流をなす Piaget 流の認知発達のアプローチによれば、普遍的な倫理観に基づく道徳性の確立は、形式的操作の可能となる思春期以降に起こるとされる。そして、この時期こそ、まさに、自我同一性の達成が行われるその時である。認知、知能の研究領域に含まれた道徳性の研究と、精神分析学の流れを汲む自我同一性の研究が同じ土俵で論ぜられることは少ないが、今後は、そうした既存の枠組みにとらわれず研究を進めてゆくことも必要になってくるように思われる。

#### 参 考 文 献

- (1) 大芦 治 1994 人の動機づけ研究への新しい試み. 上智大学心理学年報, 18, 77-82.
- (2) Rokeach, M. 1980 Some unresolved issues in theories of beliefs, attitudes, and values. In H. E. Jr. Howe, (Ed.) *Nebraska Symposium on Motivation* 1979. Lincoln : University of Nebraska Press.
- (3) Wigfield, A., and Eccles J. S. 1992 The development of achievement task value : A theoretical analysis. *Developmental Review*, 12, 265-310.
- (4) Fromm, E. 1941 *Escape from Freedom*. (日高六郎訳 1951 自由からの逃走. 東京創元社)
- (5) 藤永 保 1992 思想と人格. 筑摩書房
- (6) Goldstein, K. M. and Blackman, S. 1978 *Cognitive style : Five approaches and relevant research*. New York : Wiley. (島津一夫・水口禮治訳 1982 認知スタイル. 誠信書房)
- (7) Yung, C. G. 1926 *Analytische Psychologie und Erziehung*. (西丸四方訳 1970 分析心理学と教育. ユング著作集5, 人間心理と教育. 日本教文社)
- (8) 藤永 保 1984 増補 現代心理学. 筑摩書房
- (9) Erikson E. H. 1958 *Young man Luther : A Study in psychoanalysis and history*. New York : Norton. (大沼隆訳 1974 青年ルター. 文教社)
- (10) Erikson, E. H. 1969 *Gandhi's truth : On the origins of militant nonviolence*. New York : Norton. (星野美賀子訳:1973, ガンディーの真理 - 戦闘的非暴力の起源. みすず書房)
- (11) Erikson, E. H., Erikson, J. M., and Kivnick, H. Q. 1986 *Vital involvement in old age*. New York : Norton. (朝長正徳・朝長梨枝子訳 1990 老年期-いきいきとしたかわりあい. みすず書房)
- (12) Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.